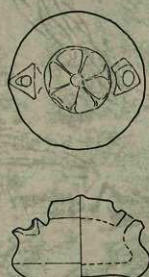
特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡38

平成19年度発掘調査・環境整備事業概報



福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

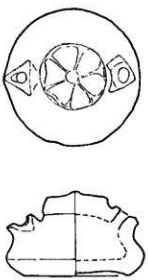
第124次発掘調査区（全景）

第124次発掘調査出土遺物（目貫鋳型）

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡38

平成19年度発掘調査・環境整備事業概報



福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

序　文

本年度の発掘調査事業は「米津」地区の本格調査（第124次）の2,500㎡と「月見櫓」跡の試掘調査（第125次）の500㎡であった。

前者からは金属工房跡関係の屋敷跡から遺構・遺物が検出され注目された。中でも土製鋳型・坩堝・トリベ・銅地金などである。特に鋳型はいずれも刀装具に関するもので高い技術を持った金工師の存在が実証された。発掘位置が一乗谷城下町の当主館をはじめとする重要施設群に近接、すなわち朝倉氏5代当主義景の夫人小少将の諏訪館跡の麓であったことも重視された。また、関係する井戸から検出された硯の背面に書写された絵画や文字は練習のためと考えられているが、当時の芸術文化のレベルを知る上で興味深い資料である。

後者からは、竪堀・郭・土塁の他に柱穴や溝跡を確認したものの、試掘調査であったため面積が限られていて、その広がりなど充分に確認できなかった。

次に環境整備事業は、平成17年度に発掘調査した第118次調査区「雲正寺」の約4,000㎡を整備した。遺跡内を通る遊歩道に近接した地区であり、一乗谷の町割を知る上で参考になる地区でもあり見学者の活用が望まれる。

本年度も関係者のあたたかいご指導・ご協力を得て計画どおり事業を進捗することができたことに対して感謝の意を表し序としたい。

平成20年3月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
館長　青木豊昭

例　言

1．本書は、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が平成19年度に実施した国庫補助事業による発掘調査、及び環境整備事業の概要報告書である。

2．本年度は、「発掘調査・環境整備事業第３次中期10ヵ年計画」の３年次にあたる。本書は第124次・第125次発掘調査の成果、第118次発掘調査区の環境整備の概要について収録した。

3．本書の作成にあたっては、調査担当者が各項目を執筆し、項目末に文責を記した。なお、全体の編集は水村伸行が担当した。

4．遺構番号の頭に付した略記号は以下のとおりである。

SA土塁（土塀・柵）、SB：建物（礎石・掘立柱など）、SD：溝・濠、SE：井戸、SF：石積施設、SG：池・庭、SI：門、SK：土壙（柱穴、埋甕等）、SS：道路（通路）、SV：石垣、SZ：暗渠、SX：その他

目　次

巻首図版

序文

例言

目次

1．平成19年度の事業概要 …… 3

2．第124次発掘調査 …… 6

　遺　構 …… 6

　遺　物 …… 17

3．第125次発掘調査 …… 29

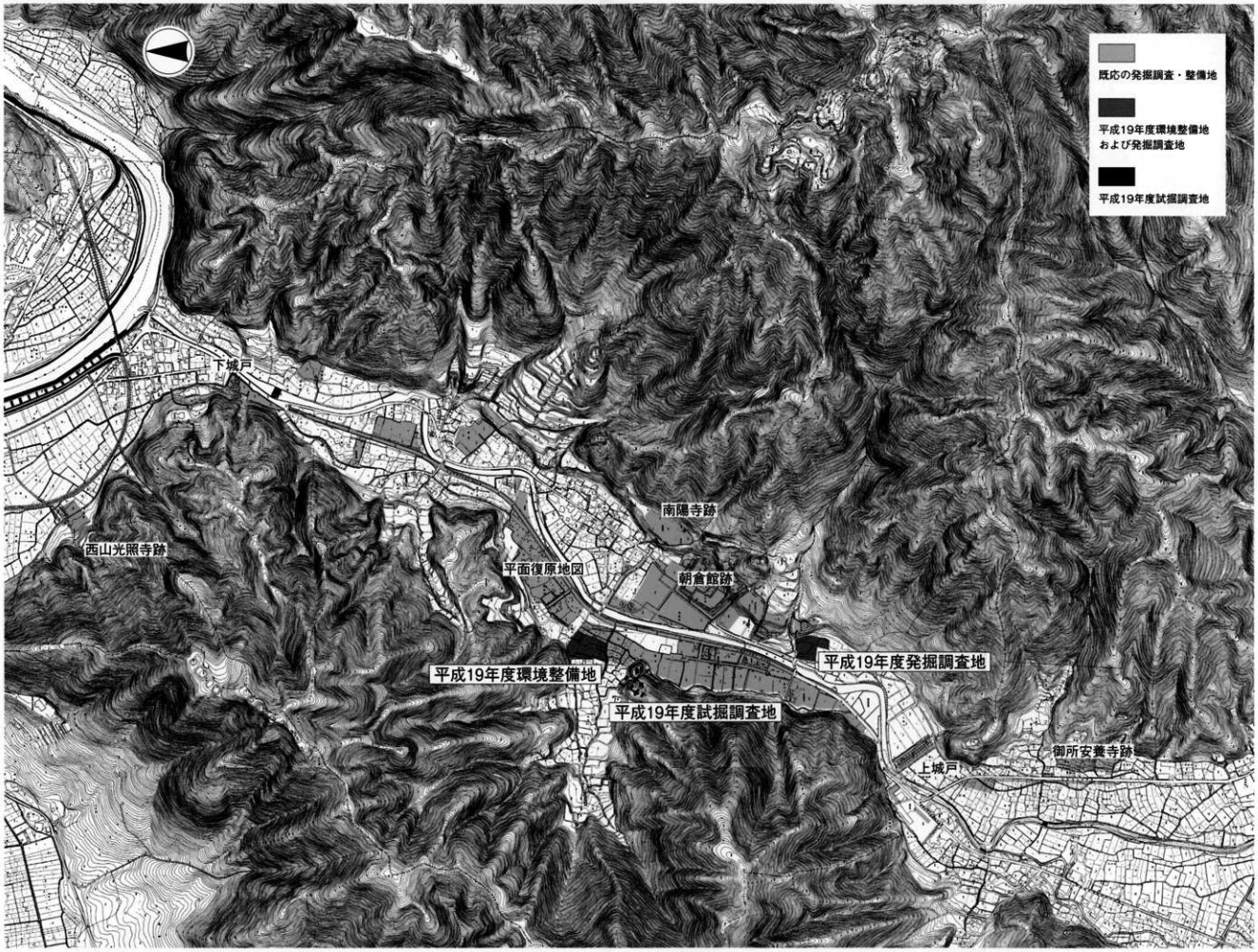
4．環境整備 …… 33

写真図版　第124次調査・遺構 …… PL. 1～ 6

　同　・遺物 …… PL. 7～14

　第125次調査・遺構 …… PL. 15～16

　環境整備 …… PL. 17～18



第1図　平成19年度発掘調査・環境整備位置図

0　500m

1．平成19年度の事業概要（第１～３図）

平成19年度は、平成17年度より始まった第３次中期10ヵ年計画の３年次目に当たり、表１に示すように発掘調査２地点（米津地区の本調査、月見櫓の試掘調査）と、環境整備１地点（第118次発掘調査地点）の事業をおこなった。

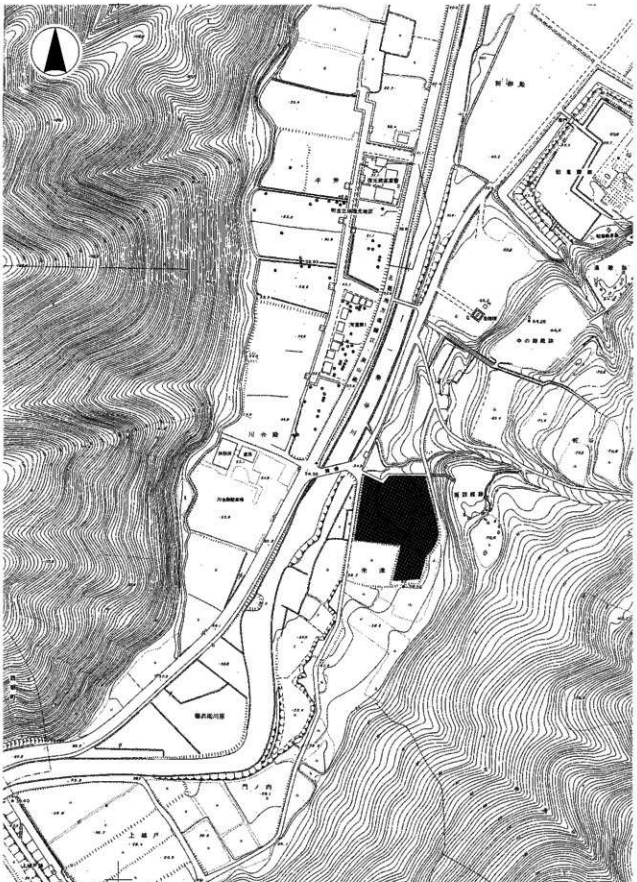
米津地区は、一乗谷の谷内を南から北方向へ流れる一乗谷川の右岸に位置し、朝倉氏最後の当主であった朝倉義景の居住した義景館の南方約250mに位置する。また、義景の側室であった小少将の館跡と伝えられる諏訪館は、本調査区の東背後の台地上に位置し、諏訪館からは本地点を直接見下ろすことができる位置関係にある。このほか、周辺には新御殿や中ノ御殿など朝倉氏にとって重要な施設が至近距離に配置されていることも、本調査地点の特徴である。また、南300mには城下町の内側と外側を画する上城戸土塁が存在する。一乗谷川を挟んだ対岸は、昭和62年に発掘調査がおこなわれた第57･58次調査地点であり、その北側は平成５年度調査の第83次調査地点である。両調査区からはともに大規模武家屋敷跡が確認されている。また、これらの地点の北に隣接した地区は現在町並立体復原地区となっている。

月見櫓は、町並立体復原地区の北に位置する字斉藤地区に突き出るような形で位置している尾根の頂部に位置する。標高は約70mを測り、平地部との比高差は約19mを測る。一乗谷川を挟んだ対岸には義景館が存在する。本地点を見下ろす位置にある斉藤地区では、土塁で区画される大規模武家屋敷が連続して確認されている。

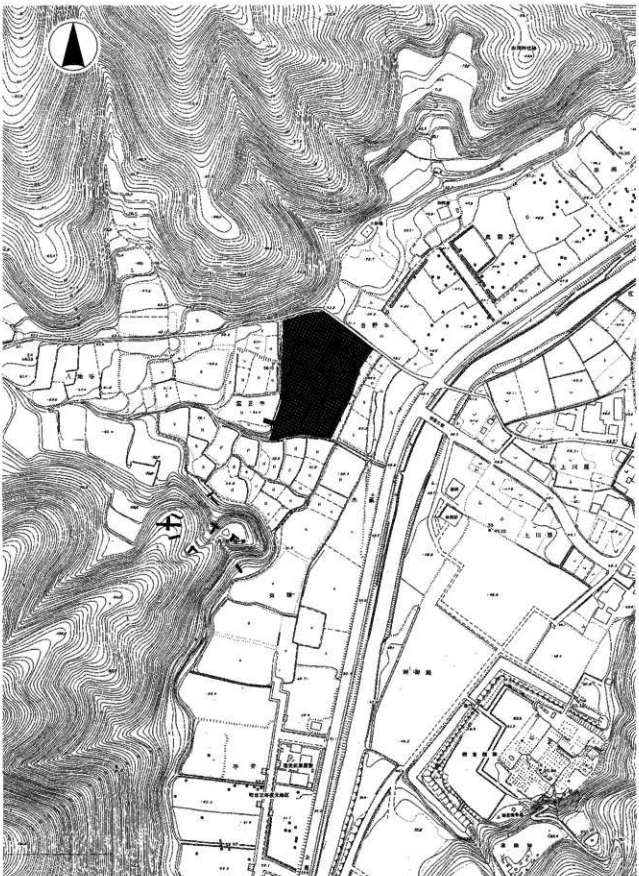
環境整備事業の対象地点は、平成17年度に発掘調査がおこなわれた第118次調査地点である。本調査地点は、後世の水田化に伴い上層遺構が大きく削平を受けていたことから、発掘調査で検出された遺構の多くは中層以下のものであった。このため、整備では全体を埋め戻しの後、主として中層以下の遺構表示をおこなった。（水村伸行）

表１　平成19年度事業概要一覧

調査次数	調査箇所	調査期間	面積	調査事由
124次	福井市城戸ノ内町字米津	平成19年４月１日～平成20年３月31日	2,500㎡	第３次中期10ヵ年計画に基づく調査
125次	福井市城戸ノ内町字八地谷･雲正寺･斉藤	平成19年10月１日～平成19年12月20日	500㎡	第３次中期10ヵ年計画に基づく調査
環境整備箇所		整備期間	面積	調査事由
第118次発掘調査区(雲正寺)		平成19年10月２日～平成20年３月28日	4,000㎡	第３次中期10ヵ年計画に基づく整備



第２図　第124次発掘調査位置図（Ｓ＝1/2000）



第３図　第125次発掘調査・環境整備位置図（Ｓ＝1/2000）

2．第124次発掘調査

第３次中期10ヶ年計画では平成19年度に米津地区、20年度に上城戸地区、21年度に門ノ内地区の発掘調査を計画している。これら米津～上城戸にかけての地区は、過去においては昭和63年度におこなわれた上城戸の発掘調査（第61・62次発掘調査）以外はおこなわれておらず、屋敷割など具体的な町並の様相については未解明な地区であったが、今回の調査により屋敷割の一端を解明することができた。なお区画割については、挿図７を参照願いたい。

遺　構（第４～８図、PL. １～６）

金属工房跡　**【区画１】**

SB6100　上層の礎石建物であるが、礎石列が調査区域外へ伸びるため規模は不明である。建物の一部は後述するSB6101と重なるものの、礎石レベルの差から本建物の方が後出するものと考えられる。また、建物の方向は本区画の外縁方向と同一である。

SB6101　下層の礎石建物であり、SB6100とのレベル差は0.15m前後である。礎石列の一部を確認したに過ぎず、規模は不明である。建物の方向は区画の方向と大きく異なっている。

SK6103　長軸1.25m、深さ0.14mを測る不正円形を呈する土壙であり、埋土は焼土である。焼土は土壙周辺にも散っており、その焼土内より鋳型が出土している。

SF6104　２基の石積施設が接続したような形態を呈しており、東側をⅠ、西側をⅡとする。Ⅰは長軸、短軸ともに0.8m、深さは0.24mを測る。底部には砂利を敷き詰める。Ⅱは長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.32mを測り、底部にはⅠと同様に砂利を敷き詰めている。Ⅰの廃棄後、Ⅱを構築したものと考えられる。レベル的にはSB6101と同じである。

SF6105　側石の残存状態が不良であったことから、明確な法量は不明であるが長軸0.9m、短軸0.8m、深さ0.3m前後を計る。

SF6106　長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.55mを測る。石積の一部は天場石より残存していた。レベル的にはSB6101と同じである。

SF6110　長軸0.9m、短軸0.8mを測る。大きく削平を受けており、側石は１段を残すのみであった。

SF6111　遺存状態は悪く、堀方から１辺約0.5mを測るものと想定される。側石は部分的に１段を残すのみであった。

SF6112　長軸1.4m、短軸0.8mを測る。遺存状態は悪く、側石は１段を残すのみであった。長軸の方向は、後述する屋敷を区画する石垣であるSV6120と同じである。

SE6108　直径0.75m、深さ3.7mを測る。底部には木材による四角形の井桁を組み、その上に石積をおこなっている。天場石が確認されなかったことから、上部は削平を受けているものと考えられる。

SE6109　長軸1.1m、短軸0.85mを測るやや梅円形を呈する平面プランを持つ。遺存状態が悪く、崩落の危険性が考えられたため、深さ2.0mで掘り下げを中止した。

SV6120　本区画の西側突出部北面の石垣であり、後述する側溝SD6121を持つ。石積は3段を確認した。

SV6122　本区画の西側突出部西面の石垣であり、北端では調査区域外のため未確認ではあるものの、先に述べたSV6120に接続するものと想定される。

SV6123　本区画の西側突出部南面の石垣である。本石垣は先に述べたSV6122との接続部とSV6124との接続部を繋ぐ石垣であったが、後にSV6122との接続部西側に4石（1.5m）を付け足し、後述するSS6127を遮断している。

SV6124　本区画の西面石垣であり、北端部でSV6123と南端部でSV6125と接続している。高さは2石分が残存していた。

SV6125　本区画の南限を画する東西方向の石垣である。平面プランは他の石垣とは異なりやや蛇行を示し、特に西側ではそれが大きい。

SD6121　本区画の西側突出部北面を区画する溝であり、幅0.15m、深さ0.45mを測る。側石は2段積である。

SS6127　SV6122の西側に沿う砂利敷道路である。幅1.4mを測り、西側のみに側溝を持つ。本道路は、当初は南方向へ伸び後述するSS6206と接続していたものと想定されるが、後にSV6123が延長された際に行止まりの道路に改変されている。

SD6128　SS6127の西側の側溝であり幅0.15mを測るが、途中で区画2により遮られている。

【区画2】

SB6129　SS6127の際に建つ礎石建物である。建物の北側はSD6128の端部で確定できるが、南・西側は共に不明である。南側については、後述するSF6134が建物内の施設と考えられることから、SF6134の南側まで建物が伸びることも想定される。そのばあい南北7.5m前後を測る。

SB6130　掘立柱建物であり、SB6129より低いレベルでの検出であったことから、これに先行する建物であると考えられる。

SX6131　蓋付の笏谷石製の箱であり、検出時には蓋が正位置で被さっていた。内部には灰色粘土が蓋の位置まで詰まっていた。SB6129に伴う施設であると考えられ、床下に設置されていたものである。　**床下遺構**

SE6133　直径0.9m、深さ4.0mを測る。積石は天端石より揃っていたことから下層の井戸と想定される。

SE6139　直径0.9m、深さ1.3mを測り、2区の西端に位置する。削平により天場石を失っていることから上層の井戸と考えられる。

SF6134　長軸1.5m、短軸0.8mを測る。SB6129の建物内の施設と考えられる。排水用の溝と想定されるSD6135が付属することから、洗い場的な用途を持つ施設と考えられる。

SD6135　SF6134の排水溝であり、幅0.2mを測る。SF6134の西面から西へ伸びた溝は、後述するSV6137を避けるように北へ屈曲し、SV6137の北端部を回り込んだのち、区画2と区画3の境界であるSV6140を横断し、SD6141へ流れ出る。

SV6137　基底部の1石のみが残存していた石垣である。

第４図　第124次発掘調査遺構全体図

【区画３】

SV6140　区画２と区画３を分ける石垣であり、幅0.3m前後の石材を使用しており、下部のみが残存していた。区画２と区画３の比高差は約0.9mである。

SD6141　SV6140の西側0.3mに石垣に沿う形で作られた幅0.15mを測る溝である。本遺跡の石垣側溝の多くは側石の一方を石垣と共有する構築手法が一般的であるのに対し、両側石を持つというやや特異な手法を用いている。南端においてSD6142と接続する。

SD6142　３区の南端を区画する溝であり、幅0.2mを測る溝である。東端では、２区から流れ出るSD6135が接続する。

【区画４】

SB6147　南北4.0mを測るが、東西は調査区域外へ伸びるため不明である。建物内の東北隅に屋内井戸であるSE6146を設置している。

SE6146　直径0.6m、深さ3.18mを測り、天場石が揃っている。SB6147に付属する屋内井戸である。

SF6148　石積施設であるが、調査時には全ての側石が崩落していた。

SB6149　西側が調査区域外へ延びるため東西は不明であるが、南北3.26mを測る全面石敷の蔵跡である。南東隅に側石を配さないことから、この部分に入口を設けていたものと考えられる。

SK6150～6152　越前焼の大甕を設置した埋甕土壙であり、SK6152からは越前焼大甕が設置された状態で検出された。

SD6153　本区画の南を画する溝である。

SV6143　区画３と４を画する石垣であり、比高差0.5mを測る。

SV6163　区画２との境界の石垣であり、比高差0.7mを測る。

【区画５】

SV6156　区画６との境界の石垣であるが、遺存状態は極めて不良であり、延長5.5mを検出したにすぎない。先に述べたSV6163とは連続する石垣であった可能性が極めて高い。

SV6204　区画４と５を画する石垣であり、比高差0.5mを測る。

【区画６】

SB6119　東西6.3m、南北1.9mを測る下層の礎石建物である。

SB6164　本区画の中心的な建物である。遺存状態が悪く礎石は揃っていないものの、レベルおよび方位が揃っていることから、東西11.6m、南北14.9mを測るものと想定される。上層の礎石建物である。

SB6176　礎石の残存状態が悪かったため規模は不明であるが、建物北側の礎石列の一部を確認した。

SS6206　後世の改変により路面は確認できなかったものの、SD6126・6165に挟まれた幅1.4mを測る道路である。西端では先に述べたSS6127と接続していたものと想定される。

SX6203　区画内を南北に横断する石列であり、本石列を境に東側が一段（約0.1m程度）高くなっている。また後述するSD6174が、本石列と接続する部分において、北方向へ屈

曲していることから、元は屋敷を画する施設であった可能性も想定される。

SX6161　下層の石列である。レベル的に先に述べたSB6119同レベルであることから、礎石建物SB6119に付属する施設である可能性が高い。

SK6166～6170　越前焼大甕を設置した土壙である。多くは甕が抜き取られた状態であったものの、SK6169内には甕が設置された状態で検出された。礎石建物であるSB6164内の施設である。

SD6159　区画５へ流れ出る溝であるが、側石は全て抜き取られた状態で検出された。下層に属する遺構であると考えられる。

SD6165　幅0.15mを測る下層遺構の溝であるが、遺存状態は悪く一部を検出したにすぎない。SS6206の南側溝である。

SD6171　区画内中央を東西に流れる溝であり、先に述べたSD6159と同一の溝である可能性が高い。側石はごく一部を除き抜き取られた状態で検出されており、下層遺構であると考えられる。

SD6173　区画内を斜方向に伸びる溝である。レベル的には上層に属するものであるが、他の遺構と方位を異にする点において特異である。また、西には砂利敷を有している。

SD6174　区画境である土塁石垣SA6175の北側側溝であり、東端で暗渠であるSZ6184に接続する。本溝は西側ではSA6175から0.5m北側に側石を設置しているが、SX6203との接続部において流路を南に屈曲させ、それ以東ではSA6175に接する形で線形を作っている。

SD6208　東西溝であるSD6159に接続する南北溝である。側石は全て抜き取られた状態で検出されており、下層遺構であると考えられる。

SD6102　本区画の東を画する溝である。後述する土塁SA6177の西側側溝であるが、遺存状態は悪く、ごく一部を検出したに過ぎない。

SA6175　区画６の南端を画する土塁石垣であり、長さ33.0mを測る。本土塁は西側では幅1.5mを測るが、SX6203の石列以東では幅0.9mに減じている。

SA6177　区画６と７を分ける土塁石垣であり、幅1.1m、長さ12.4mを測る。北端は区画１の石垣であるSV6125に接続し、南端はSA6175に接続する。本土塁石垣の構築時期については、SV6125の構築後に付け足されていることが、SV6125と本土塁石垣の接続状況から考えられる。

SF6158　長軸2.8m、短軸1.0mを測る。平面プランは北側石が中程で一石分広がっており、特異な形状を示している。

【区画７】

SD6178　SA6177の東側石であり、幅0.2m、長さ12.0mを測る。溝の南端部において両側石を検出したものの、大部分は遺存状態が悪く堀方を確認したのみである。

SD6183　東西溝であり、西端では暗渠SZ6184を介してSD6174に接続する。またSZ6184との接続部において南北溝SD6178と直角に交わる。

SD6186　区画内中央を東西に伸びる溝であり幅0.25mを測る。西端では暗渠であるSZ3185に接続する。本溝は後述するSB6189の雨落溝の機能を有している。

SD6188　区画内西側を南北に伸びる溝であり、北端ではSZ6187に接続している。

SZ6184　SA6174とSA6177の接続部に構築された暗渠である。本暗渠に接続する溝およ

び暗渠は多く、SD6178・6183、SZ6185がそれぞれ接続している。

SZ6185　SD6186の西に接続する暗渠であり、蓋石が良好に依存していた。本暗渠は南から伸びるSZ6187を接続したのち、SZ6184へ流れ出るものと考えられる。

SZ6187　SD6188とSZ6185を接続する暗渠である。

SE6179　区画７の北西隅において検出した井戸であり、直径0.6mを測る。天端石は良好に依存していたものの、途中で積石が抜けていたため約2.0mの掘り下げで掘削を中止した。

SF6182　0.9m四方を測る石積遺構である。南側石はSD6183の北側石と接して積まれていることから、両者が同時期に構築された可能性が高いものと考えられる。

SF6202　SB6201の南で検出された、長軸1.0m、短軸0.9mを測る石積遺構である。

SB6189　SD6186の南に建てられた礎石建物であり、東側が調査区域外に伸びている可能性があるものの、現況では東西8.5m、南北8.4mを測る。本建物内には、後述する多数の越前焼甕が設置されていた。

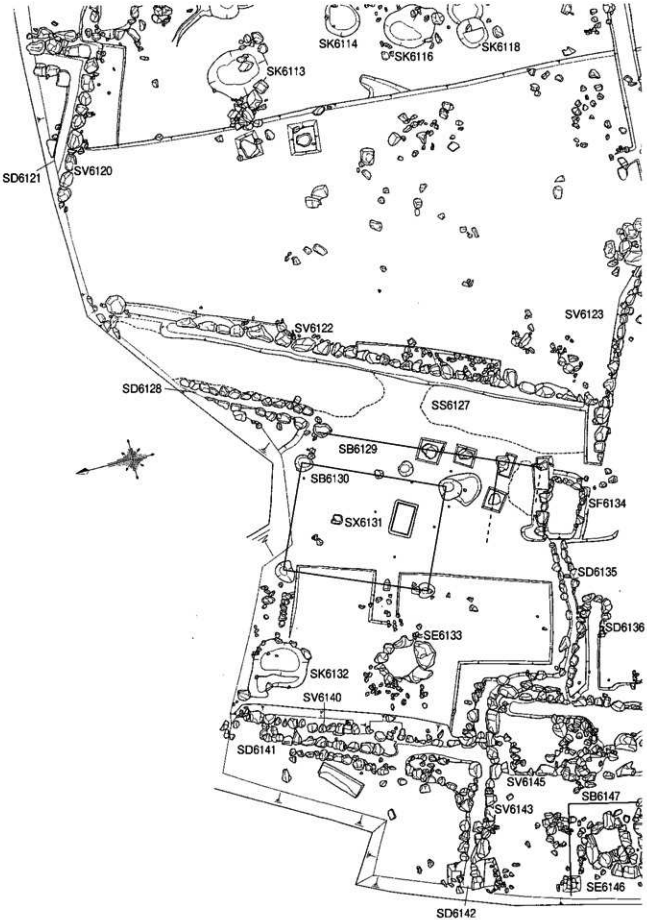
SB6201　SB6189の西に隣接して建てられていた掘立柱建物であるが、遺存状態が悪く、明確な平面プランについては確認できなかった。本建物内には炉跡と想定されるSK6205が設置されている。

SK6190～6199　SB6189内に設置された越前焼大甕の設置土壙である。

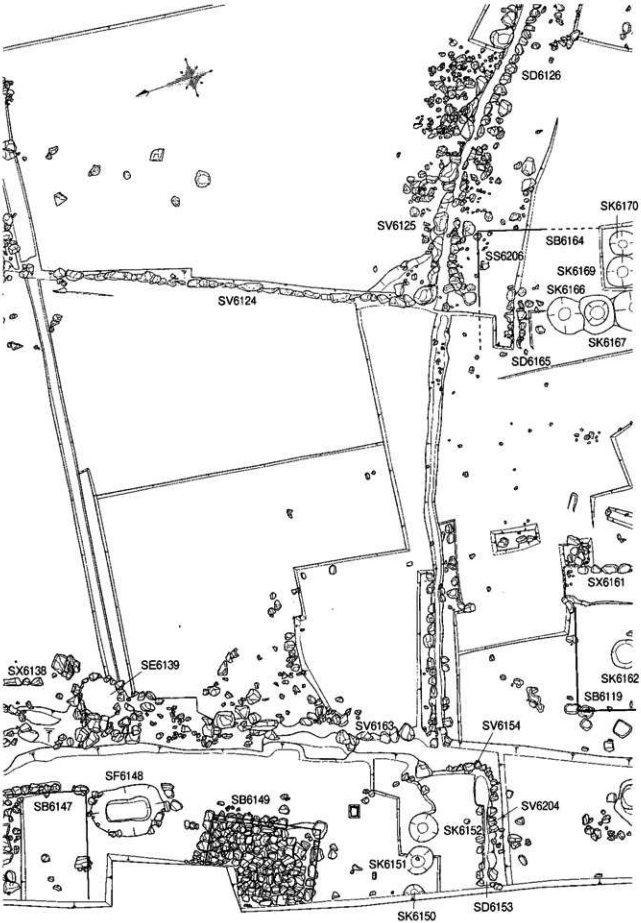
SK6205　長軸2.2m、短軸1.8mを測る。土壙内底面には握り拳程度の石を密に敷詰め、その上に笏谷石製の大型バンドコ２個を組み合わせて設置していた。土壙内には炭化物のみが充填されていたことから、炉跡と想定される。　**炉跡**

SS6207　部分的に砂利面が確認されたにすぎないが、区画７の西側に並行する道路と考えられる。

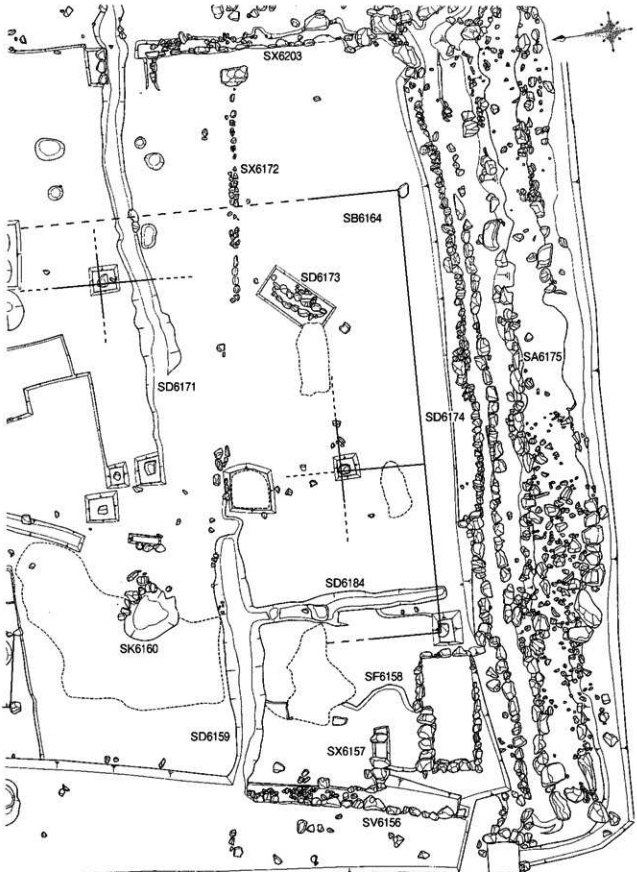
（水村伸行）



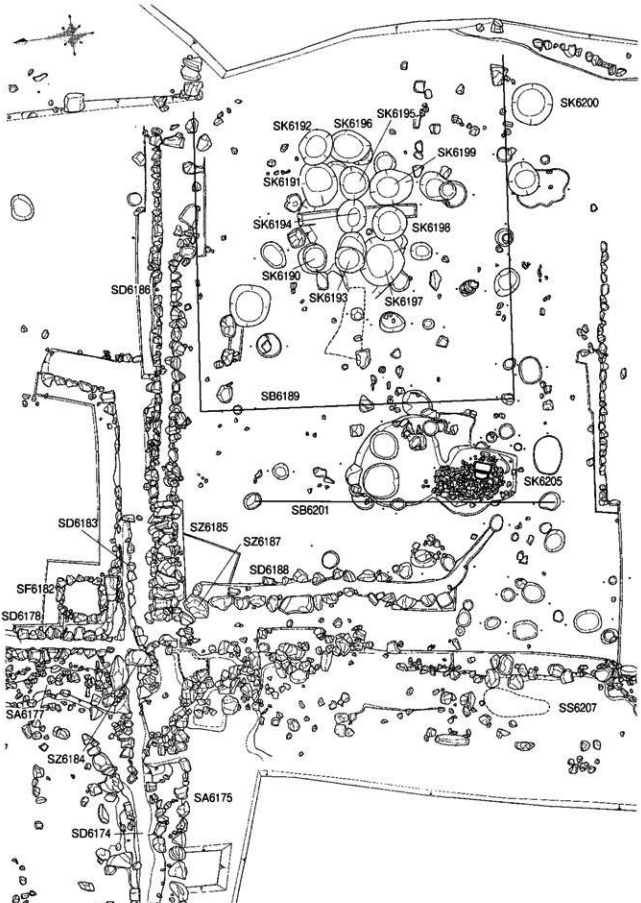
第５図　遺構詳細図 (1) (S = 1/100)



第6図　遺構詳細図 (2) (S = 1/100)



第７図　遺構詳細図 (3) (S = 1/100)



第８図　遺構詳細図 (4) (S = 1/100)

遺 物 （第９～13図、PL ７～14）

第124次発掘調査で出土した遺物の総数は、41,435点である。近年の一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査の中では遺物点数が多い調査区であり、調査面積2,500㎡に対する1㎡あたりの遺物密度は16.6/㎡点である。遺物の各器種内訳は表２に示すとおりである。

表２　第124次発掘調査出土遺物一覧

器種			点数	%
日本製陶器	越前焼	甕	9,716	
		壺	2,145	
		鉢	585	
		擂鉢	1,276	
		卸皿	5	
		蓋	100	
		花生	9	
		その他	6	
		計	13,842	33.4
	陶器	皿	21,415	
		土釜	39	
		土鈴	11	
		花押文	3	
		羽口	11	
		耳皿	2	
		壺	13	
		その他	39	
		計	21,533	52.0
	瓦質	鍋	261	
		皿	36	
		茶人	4	
		壺	137	
		小瓶	2	
		香炉	1	
		水滴	1	
		鉢	2	
		水注	1	
		瓶	5	
		桶	3	
		その他	1	
		計	454	1.1
	瓦質	鍋	31	
		皿	269	
		壺	31	
		鉢	43	
		香炉	1	
		擂鉢	1	
		瓶	1	
		卸皿	1	
		その他	1	
		計	379	0.9
	瓦質	風炉	19	
		香炉	10	
		鉢	6	
		瓦燈	3	
		その他	20	
		計	58	0.1
	国産他	丸瓶器	66	
		瓶底器	321	
		信楽焼	168	
		信楽擂	4	
		備前	4	
		黄瀬戸	11	
		丹波	368	
		不明	23	
		計	965	2.3
	小計		37,231	89.9

器種			点数	%
中国製陶器	青磁	碗	358	
		皿	232	
		香炉	10	
		瓶	9	
		鉢	29	
		壺	4	
		蓋	2	
		その他	2	
		計	646	1.6
	白磁	碗	13	
		皿	992	
		坏	65	
		香炉	1	
		壺	2	
		合子	1	
		蓋	1	
		瓶	3	
		その他	5	
		計	1,083	2.6
	染付	碗	204	
		皿	703	
		坏	4	
		壺	2	
		その他	2	
		計	915	2.2
	その他	赤絵	2	
		緑釉	2	
		褐釉壺	41	
		黒釉碗	1	
		華南彩釉壺	2	
		計	48	0.1
	小計		2,692	6.5
朝鮮製		象嵌壺	15	
		碗	7	
		皿	8	
		瓶	97	
		その他	3	
	小計		130	0.3

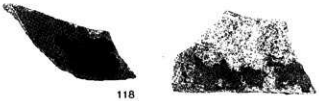
器種			点数	%
金属製品		刀	63	
		小刀	1	
		鉄鏃	6	
		鎌	1	
		足金物	1	
		銅銭	40	
		刀装具	3	
		鐔金具	2	
		鉱滓	1	
		兜金	2	
		経金物	1	
		銅地金	2	
		分銅	1	
		その他	30	
		小計	154	0.4
石製品		パンドコ	394	
		火打石	1	
		砥石	5	
		鉢	83	
		臼	74	
		硯	31	
		砥石	65	
		叩石	2	
		風炉	15	
		玉石	69	
		板碑	5	
		板石	23	
		井戸枠	2	
		石製	1	
		石仏	1	
		その他	159	
		小計	970	2.3
木製品		漆椀	3	
		漆皿	1	
		箸	1	
		櫛	3	
		櫛	1	
		曲物	2	
		縁板材	23	
		柱材	6	
		加工木	39	
		竹	4	
		炭化材	26	
		桶	4	
		その他	14	
		小計	128	0.3
その他		粘土	23	
		種子	7	
		炭化した米	1	
		錆煙	56	
		骨	8	
		雲母	4	
		埋墓	4	
		鉄塊	13	
		羽口	13	
		トリベ	1	
		小計	130	0.3
合計			41,435	100.0

本調査区から出土した遺物の特筆すべき点として、金属加工職人に関係する遺物が挙げられる。また、他にも井戸や石積施設内から良好な状態で出土した遺物が多数みられた。以下に主要遺物を紹介する。鋳型および関連遺物については後半にまとめて記述する。

越前焼　1は区画7のSK6200に埋設された状態で出土したⅢ群aの大甕である[1]。耕作土を除去した段階で口縁部が地表に露出し、甕内部の土を取り除いたが、底部の破片が出土しなかったことから、朝倉氏遺跡で通常検出される埋甕施設とは異なり、底を抜いた状態で口縁部まで埋めて使用していたと推察される。大きく張った肩部には「本」と格子目のスタンプが押される。2はSK6169に埋設されていたⅣ群aの大甕である。底部は抜き取られずに焼土が詰まった状態で埋まっていた。口径85.8cm、器高83.7cmを測り、肩部にはヘラ記号とともに、「本」と格子目のスタンプが押される。3は口径31.0cmを測る小甕である。肩部にヘラ記号を有し、口縁部は肥厚する。4は口縁部が肥厚したⅣ群の大甕である。5・6は口縁部の立ちあがる中甕である。7は口径24.0cmを測る小甕で、肩部に凸帯が貼り付けられている。8・10は肩部が大きく膨らむ形の壺である。9は丸みを帯びた口縁が外反する壺である。11は口径12.6cm、器高18.5cmを測る壺で、やや焼成不良で内面から外面肩部にかけて煤が付着する。12は口径12.8cm、器高19.5cmを測る壺で、口縁には片口が作られる。13・14は口縁部の内湾する鉢で、13は口径15.2cm、器高6.0cmを測る。15・16は大型の丸鉢である。17・18は平鉢。19の平鉢は、内面に5条1組の櫛目を層型に連続して入れている。20はⅢ群aの擂鉢で、10条1組の擂目が入れられる。21から25は口縁が内傾しているⅣ群の擂鉢。26は口径47.6cm、器高15.8cmを測るⅢ群bの擂鉢で、擂目は密に入れられ、焼成良好。27は筒状に立ちあがる形から桶と考えられるが、内面に縦長に粘土を貼り付けて、耳が作られている。その形状から耳に紐などを通して吊り下げるような使用法が考えられるが、一乗谷朝倉氏遺跡では、掛花生として使用されたと考えられる器壁に穿孔のある筒型製品の出土例は多数あるが、27のような製品は出土していない。28は口径18.8cm、器高19.4cmを測る桶である。29は口径15.6cm、器高4.3cmを測る御皿である。118は越前焼の甕の破片と考えられるが黒漆による補修痕がみられる。119は同じく甕の破片であるが、布をあてて黒漆を塗布して補修した痕が残る。120は竹を模した筒形容器で、掛花生と考えられる。

補修痕のある越前焼甕

越前焼掛花生



118　119

挿図1　補修痕のある越前焼甕破片写真

120

挿図2　越前焼掛花生写真

注1）越前焼大甕・擂鉢の分類については、『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』福井県立朝倉氏遺跡資料館　1983年参照。

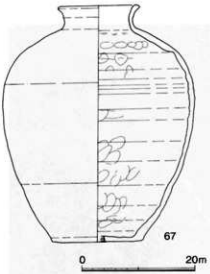
土師質　出土した土師質製品の99.5%は皿（カワラケ）である。区画２の石積施設SF6134からは大量の完形のカワラケが出土した。30はC1類の土師質皿で、口径5.6cmを測る[2]。胎土はやや白色を呈し口縁部が摘み上げられている。31は底部を押し上げたA類のへそ皿である。32はC1類で、胎土が白く器壁がうすい作りである。33は口径6.7cmを測るB類皿。35もB類で、口縁部は波打つように不定形で器壁は厚い。36～38はC2類の皿で、口縁部にタール痕がみられる。39はD1類でタール痕はみられない。40は口径11.9cmを測るD2類の皿で、口縁には全体にタール痕がある。41・42は同じくD2類の皿である。43は耳皿。44はG類の丸皿で口径5.0cmを測る。

瀬戸美濃製品　45～47は鉄釉碗である。45は透明度のある鉄釉が厚くかかり釉垂れをおこしている。47は口径11.8cm、器高6.3cmを測り、鉄釉の色調は白濁しており、クリームがかった色調を呈する。48は口径9.6cm、器高2.5cmを測る鉄釉皿で糸切り底になっている。釉薬は口縁部のみにかかり、見込み、底部は露胎となっている。49も同じく鉄釉皿。50は口径5.4cmを測る小型の鉄釉皿で、外面下部はシブ鉄が塗布される。51は同じく小型の鉄釉皿で釉薬はやや黄緑色を呈する。52は鉄釉の水滴で、蓋の部分のみ灰釉がかかる。蓋の部分は上からみると放射状に模様の意匠がなされる。胴部２ヶ所に注口が作られ、蓋は身と接着して作られており外れない。本遺跡ではこのような作りの水滴はこれまで出土していなかったが、九州の観世音寺発掘調査で同型の水滴が出土している（『観世音寺・遺物編２・』九州歴史資料館2007）。53は鉄釉の小壺で、芋子型の茶入と考えられる。54は同じく鉄釉の内海型の小壺である。55は底径5.6cmを測る鉄釉壺。56は口縁がやや窄まって立ちあがる鉄釉瓶。57は区画２で検出された土壙SK6132から完形で出土した鉄釉瓶。口径4.2cm、器高8.7cmを測る。同形の鉄釉瓶はこれまでにも第15次調査区などから出土しており、このときは出土状況などから、整髪用の油を入れた容器と推定されてきた。本調査区出土の鉄釉瓶に関しては、焼土の詰まった土壙内からの出土であるが、他の出土遺物はカワラケなどで、使用方法を推定するには至らない。58は底形20.2cmを測る大型の鉄釉瓶で、下部はどっしりと膨らんでいるが、それに対して口の部分は小さく細く作られている。59は底部から真っ直ぐ立ちあがる鉄釉の桶である。60も同じく鉄釉桶であるが、底部からやや丸みを帯びて立ちあがる形状である。61～65は灰釉皿である。61は口径10.6cm、器高2.8cmを測り、内面縁には波状の線刻がされる。65は口径17.6cm、器高3.4cmを測る灰釉皿で見込みに菊花文のスタンプが押される。66は高台が付く灰釉壺。

鉄釉水滴

信楽焼壺　**信楽焼**　67は口径13.2cm、器高41.6cmの信楽焼壺である。すぼまった口縁部が短く立ち上がり、肩部の張った壺は、越前焼では多く出土するが、信楽焼の出土は少ない。区画６のSK6169の埋甕施設からまとまって破片が出土し、全形の復元が可能となった。色調は白っぽい茶褐色で、胎土には長石の粒が混じる。口縁から肩部にかけては、降灰によりゴマのような白点がみられる。68は口径14.3cm、器高12.3cmを測る、円筒形の桶である。小ぶりな形状から、水指などの茶道具として使用が考えられる。

注２）土師質皿の分類については、『特別史跡　一乗谷朝倉氏遺跡　発掘調査報告』Ⅰ　1979年参照。



挿図３　信楽焼壺実測図

挿図４　信楽焼壺写真

国産陶器　69は外面が暗黒色を呈する筒型容器である。竹の節を模した掛花生と考えられる。

中国製陶磁器　70は外面に線描き蓮弁文の施された青磁碗で、内面には花文が線刻される。71は口径14.6cm、器高7.0cmを測る無文の青磁碗である。72はやや外反する高台の青磁皿と考えられる。しかし、内面は露胎で口縁部は打ち欠いているので、壺や瓶のような形状の製品の底だけを再利用したものと推測される。73の青磁皿は外面に鎬蓮弁文、内面に線描蓮弁文が施されている。74の青磁皿は口径8.0cm、器高3.8cmを測り、内面に線描文がある。器壁は厚くしっかりとした作りになっている。75は口径11.4cm、器高3.7cmを測り、73と同様に外面に鎬蓮弁文、内面に線描蓮弁文が施されている。77は青磁の菊皿である。78は口径18.6cm、器高4.9cmを測る青磁皿である。内外面ともに無文で貫入がみられる。79は青磁瓶で、いわゆる中蕪花生の下部で、青磁釉の色調は淡緑色を呈する。80は碁笥底の白磁皿であるが、外面のみ黄褐色の釉薬がかけられる。漆による補修痕がみられる。81 ～ 88は白磁皿である。81は内面見込みや高台内が露胎になっている。89・90は白磁坏で、90は口径6.8cm、器高4.0cmを測る。91 ～ 94は染付碗である。94は見込みに梵字が描かれる95 ～ 100は端反の染付皿でＢ群に分類される[3]。100は口径12.0cm、器高2.7cmを測る染付皿で、見込みには玉取獅子が、外面には唐草花文が描かれる。

朝鮮半島製品　101は雲麦茶碗。102は雲麦釉のかかる瓶で、底径10.8cmを測る。

金属製品　103は真鍮製の小柄で、全長9.6cm、幅1.4cmである。表面の腐食が激しいため文様等は確認できない。104は鉄鏃。105は刀装具の足金物で緑青が浮く。106は兜金で表面に黒漆が塗られる。107はSE6146から出土した銅製の分銅で重量は140gである。井戸内が出土したため状態は非常に良好で全く錆が出ていない。中央部がくびれている六角形の形をしており、細かい意匠が施されている。同様の形の分銅は第29・30次調査でも出土している。108は銅製の飾金具で、鋲を打って固定するための穿孔が施されている。

銅製分銅

石製品　109は小型の硯である。110の硯は区画２の北側に位置する井戸SE6133から出土した。長さ11.2cm、幅7.2cmで、裏面に様々な絵や文字が線刻される。判読できる文字と

絵や人名の線刻された硯

注３）染付の分類については、小野正敏「15 ～ 16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』№２ 1982年参照。

しては①「仙（花押）」、②「□□□□殿」、③「井口新三郎殿まいる」という3つの人名が確認できる。③の「まいる」は、手紙の宛所を書いたときの脇付である。これは硯の所有者の名前ではなく、文書を書く練習として彫られたものと推測される。井口新三郎については、「剣神社文書」の永禄3年（1560）12月26日付け「朝倉義景黒印状」によって、「白川之井口与四郎」なる人物が、義景から5貫文を給付されていたことが確認されるので、これに関係する人物とも推定される。絵については、入母屋造で板葺き屋根と思われる建物や、松・竹・草などの植物、鶴などが描かれる。121の硯は火を受けたためか、石が変色し剥離しやすくなっている。

井口新三郎

110

挿図5　硯裏面写真

111は用途不明石製品である。硯状の形状をしているが、内面の彫りは荒く磨かれていない。112は同じく用途不明の製品で、四面ともに文字や文様の線刻がみられる。113は楕円型のバンドコの蓋。114のバンドコは同じく楕円型で高さは15.2cm。115のバンドコはD型のもので、高さは15.3cmを測る。116・117は砥石。（宮永一美）

出土鋳型および関連遺物

鋳型

今回の発掘調査では多量の鋳型が出土した。鋳型の種類別に目貫11点、笄10点、縁金物と考えられるものが4点、兜金が2点、栗形1点、縁頭1点、鍔3点、不明5点の合計37点となる。全て刀装具の製作に関わる鋳型である（不明鋳型を除く）。個別の法量や文様等については表3に示すとおりである。

特徴としては、非常に細かな粘土を使用して鋳型の製作を行っていることである。これはすべての鋳型についていえることで、砂の混入がほとんど観察できない。また、鋳型に残る痕は非常に微細な線や文様であり、刀装具の製品そのものに粒子の非常に細かな粘土を押し当てている様子が窺える。栗形（No.28）の鋳型は製品に厚さ2mmの真土をあて、周りに5～10mm厚の粗型をあてる二重構造が顕著に確認できる。粗型も粒子の細かい粘土を利用している点は特徴といえる。出土したすべての鋳型は高温で溶融した金属が注がれた様子は無いように思われる。また、中子といわれる内型が出土していない。

挿図7に示すように鋳型の多数は区画1からの出土である。鋳型以外にも刀装具を製作する際に使用したと考えられる坩堝、トリベや鞴の羽口がやはり区画1から出土している。それらの中には口径約6.5cmの土師質皿を2枚重ね合わせ鋳造容器（坩堝・トリベ）として転用されているものも多数出土した。その他、同区画からは非常に清純な銅地金や鉱滓なども出土するなど、刀装具の製作を窺わせる（挿図6）。

これまでに一乗谷朝倉氏遺跡では鋳物職人の存在を示す調査として赤淵・奥間野・吉野本地区の第36次調査（1979年）や第44次調査（1982年）などが挙げられる。「町並立体復原地区」となっている第82次調査（1993年）の武家屋敷跡からは、鉱滓や羽口などの出土とともに鍛冶炉をもつ掘立柱建物を確認している。また、南陽寺跡の第64・65次調査（1989年）では、明確な鋳造遺構は確認できないものの梵鐘の撞座と龍頭部分の鋳型を確認している。

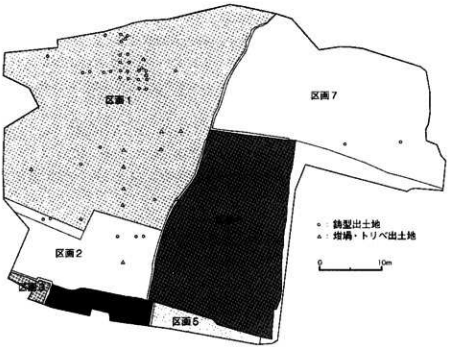
本遺跡の鋳型出土は2例目であり、福井県内では表4に示すように6例目となる。本調査区出土の鋳型は刀装具のみに限られているという特徴をもつ。また、坩堝、トリベ、椀の羽口、地金や鉱滓など、当地での製造を示す遺物が多数出土したことは非常に重要なことである。（川越光洋）

表3　第124次調査の出土鋳型一覧

No.	種類	図柄	法量(cm)	写真番号	No.	種類	図柄	法量(cm)	写真番号
1	目貫	連獅子	2.4×4.2×1.5	122	21	笄	不明	2.6×(3.2)×1.4	142
2	目貫	連獅子	2.4×3.9×1.3	123	22	縁金物	文様有	3.2×5.0×1.7	143
3	目貫	三連獅子	2.6×4.8×1.6	124	23	縁金物	文様有	2.25×4.3×1.6	144
4	目貫	連虎	2.3×4.4×2.1	125	24	縁金物	草花	(1.7)×(2.9)×1.5	145
5	目貫	連猪	2.4×4.3×1.6	126	25	縁金物	文様有	(1.7)×(3.8)×1.5	146
6	目貫	猪	2.4×3.7×1.2	127	26	兜金	鱗状	(4.6)×(2.6)×1.8	147
7	目貫	連鳥	2.7×3.2×1.4	128	27	兜金	－	(1.7)×(5.0)×2.2	148
8	目貫	逆龍	3.1×4.9×1.2	129	28	栗形	文様有	(2.2)×(3.5)×2.7	149
9	目貫	三連亀	2.8×4.2×1.4	130	29	縁頭	文様有	(2.35)×(4.3)×2.7	150
10	目貫	松	1.9×3.9×0.9	131	30	鍔(接合)	葵葉形	(5.5)×(6.3)×1.5	151
11	目貫	植物の葉	2.4×3.4×1.2	132	31				152
12	笄	逆龍	2.3×(5.4)×1.0	133	32	鍔	葵葉形	(3.1)×(4.0)×2.3	153
13	笄	逆龍	2.7×(5.9)×1.1	134	33	不明	文様有	(2.2)×(4.5)×0.8	154
14	笄	逆龍	2.9×(4.9)×1.6	135	34	不明	梵字	(2.8)×(2.9)×1.6	155
15	笄	草木	3.3×5.1×1.3	136	35	不明		(3.2)×(5.5)×2.1	156
16	笄	牛・牛車・梅	2.6×(5.9)×1.1	137	36	不明		(2.8)×(4.4)×2.1	157
17	笄	牛	2.1×(4.0)×1.3	138	37	不明		(2.4)×(4.6)×(2.7)	158
18	笄	水草・昆虫	2.2×(8.3)×1.8	139					
19	笄	雲・波文	3.0×(5.6)×1.0	140					
20	笄	笄文・円文	2.5×4.6×1.1	141					

（　）は、残存長

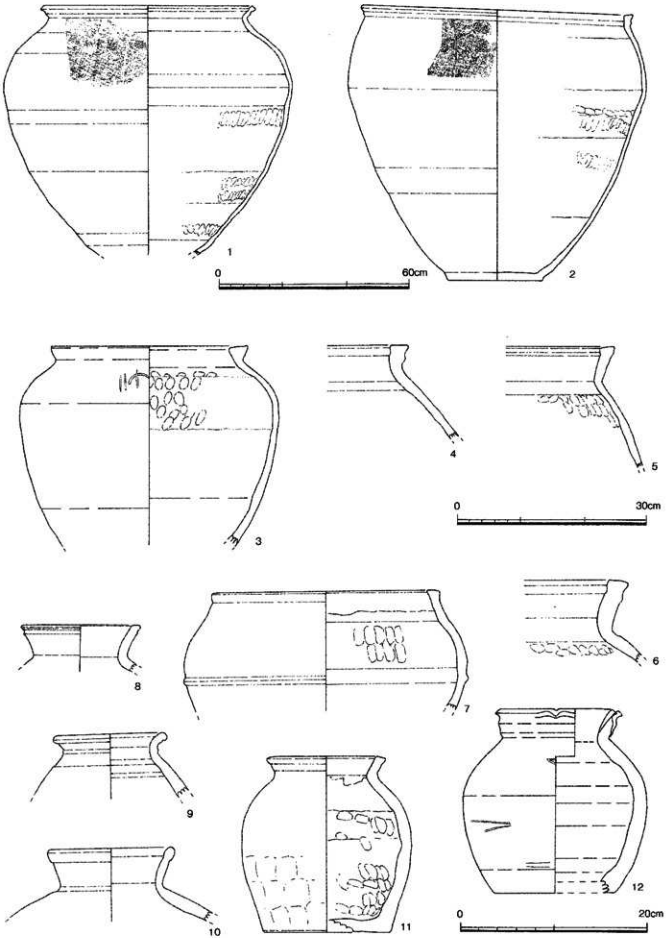
挿図6　関連遺物（トリベ、銅地金）写真



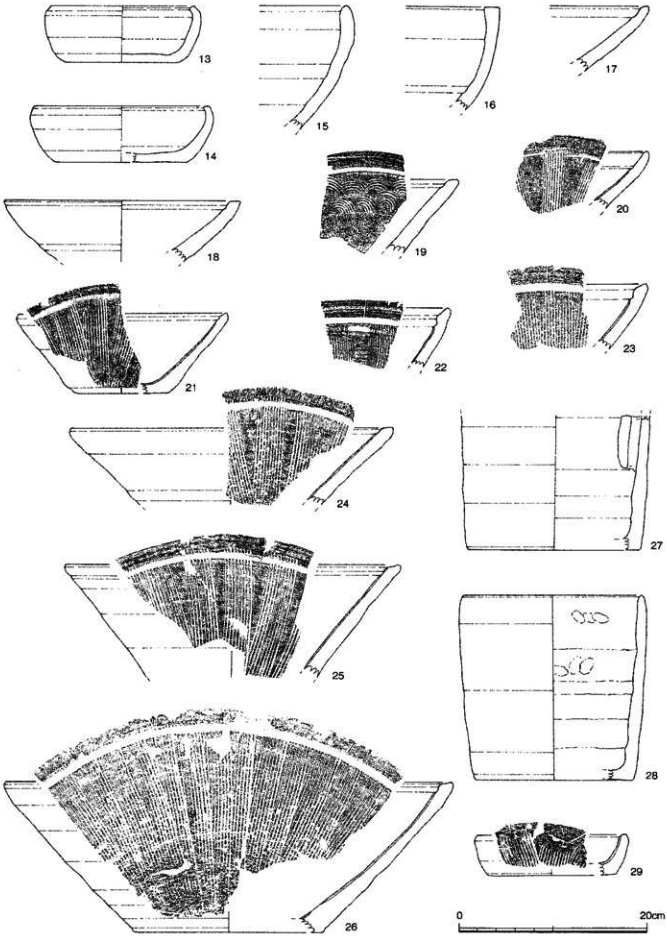
挿図7　鋳型および関連遺物の出土位置図

表4　福井県内の鋳型出土例

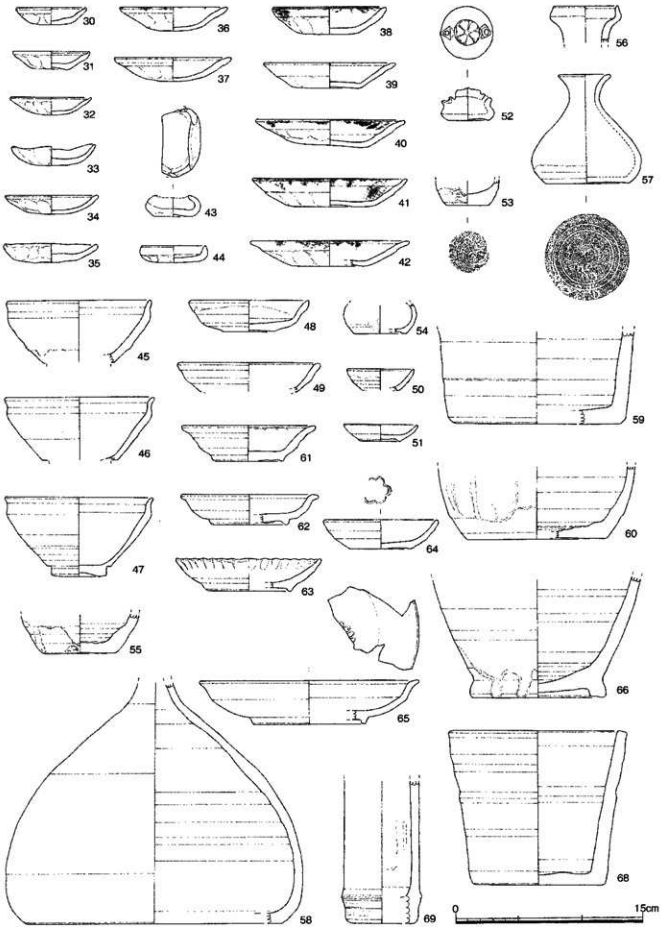
遺　跡　名	所在地	時　代	出土鋳型	調査年
加戸下屋敷遺跡	坂井市三国町	弥生時代	銅鐸の鋳型	1985 ～ 86 年
篠尾廃寺	福井市篠尾町	平安時代	梵鐘の鋳型	1971 年
豊原寺跡	坂井市丸岡町	中世	梵鐘の鋳型	1980 年
一乗谷朝倉氏遺跡 南陽寺跡（第 64・65 次）	福井市 城戸ノ内町	中世	梵鐘の撞座、 龍頭の鋳型	1989 年
福井城跡（桜木御門跡付近）	福井市 手寄地区	近世	引手金具の 石製鋳型	2003 ～ 04 年



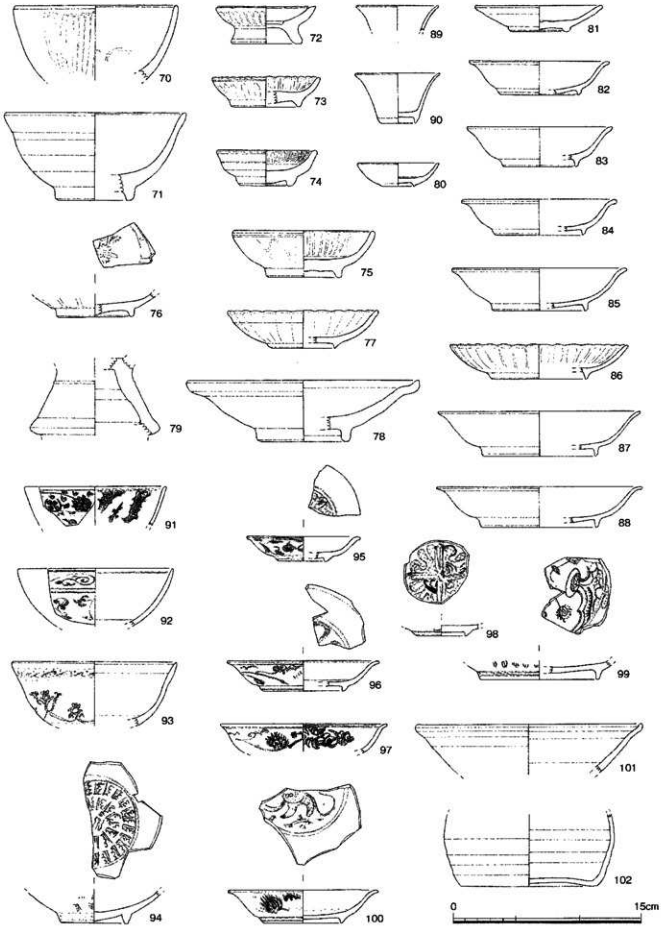
第９図　第124次調査出土遺物 (1)



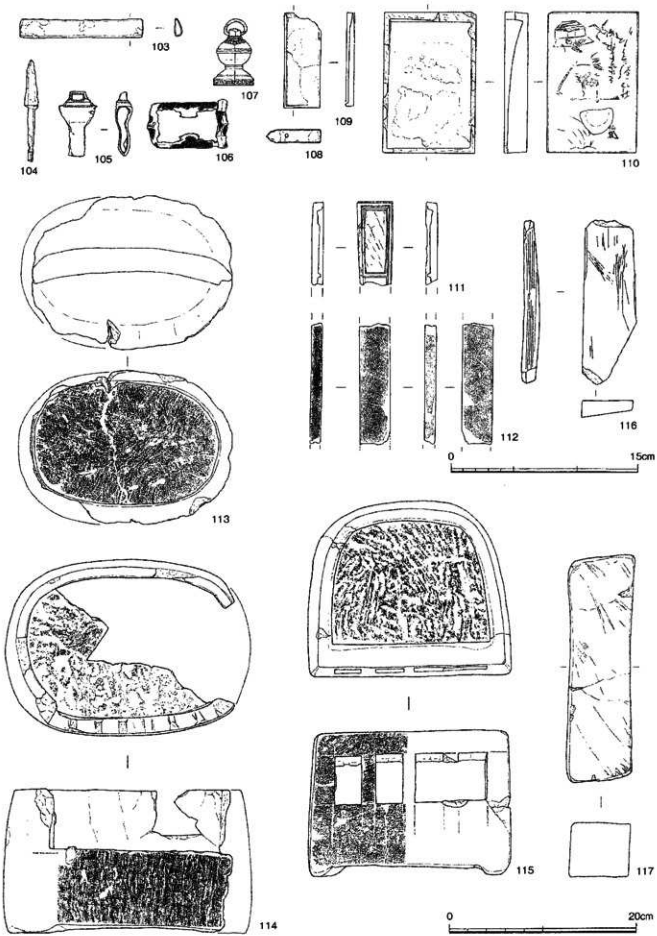
第10図　第124次調査出土遺物 (2)



第11図　第124次調査出土遺物 (3)



第12図　第124次調査出土遺物 (4)



第13図　第124次調査出土遺物 (5)

3．第125次発掘調査（月見櫓地区試掘調査）

本試掘調査は、平成19年10月1日より12月20日までの期間、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡における月見櫓地区（城戸ノ内町35字八地谷・17字雲正寺・23字斉藤）にて依存状態を把握するため実施した。当地は私有地であり、事前に試掘坑の位置確認等について地権者と十分に話し合いや立会を行った上で実施に至った。9ヶ所のトレンチ調査を実施し合計面積は137㎡である。

福井市安波賀町春日神社所蔵の江戸時代制作という『一乗谷古絵図』に「月見山」とあり、松雲院と描かれる現在の朝倉館跡の一乗谷川を挟んだ向かいに描かれる。青山作太郎氏による昭和47年（1972年）発行の『一乗谷　朝倉史跡・伝説』には「月見櫓跡　朝倉館跡西方前方三百米の地点にある。高さ二十米、頂上に巾七米長さ十米の櫓跡があり北方に巾五米長さ五十米傾斜三十五度の大堅堀とによって、半島形の尾根の先端を利用して、峰

第14図　月見櫓地区試掘坑配置図（S＝1/1000）

続きに人工を加え、空濠を以って南方の堅堀に続き、独立峰を構成、此処より二米－三米の道路は曲折四十五米を隔てて周囲五十五米の台地に続いている。想像するに此地は、月見の節重臣達の集いの場ではなかったか。此地は月見櫓西方の最先端となっている。」として明記された。また、南洋一郎氏は月見櫓跡を踏査し、遺構概念図（1991年）を作成した。

これら概念図などにもとづき試掘坑を設定することが最善であったと思われるが、諸条件のなか第14図に示す試掘坑の配置となった。下記に試掘調査結果を報告する。

遺　構（第14～15図、PL.15～16）

月見櫓跡の北側に存在する東西に長い平坦面に幅1m、長さ6mの試掘坑を山裾より設定した。遺構確認面は標高約55.1mである。山裾では笏谷石といわれる緑色凝灰岩製の板状石製品を埋設して区画した内に礎石が据えられ、周囲に1～3cm大の砂利を敷詰めた遺構が確認された。その他、溝１条とピット１基を検出した。　トレンチ１

トレンチ１と同じ平坦面に幅1m、長さ8mの試掘坑を設定した。遺構確認面は標高約55.1mでトレンチ１と同じである。掘立柱建物の柱穴を3基確認した。　トレンチ２

月見櫓跡と、その西側に存在する標高76.4m付近に平坦面をもつ郭とを南西から北東へ傾斜し分断する堅堀の標高約62.5～65.5m付近に設定した。検出された堅堀はU字に近い箱堀で幅2.3m、最大深度約0.6mを測る。傾斜は約24度である。西側には最大幅約1.5mを測る階段状の犬走を確認した。東側には溝を伴う犬走状の平坦面が存在する。　トレンチ３

また、検出した堅堀の北端では、堅堀の底から深さ約0.7m、幅約1.2mの土坑の一部を確認した。土坑南端は深さ約0.1mの窪みがある。側面は粘土が貼られ、赤褐色に堅く焼きしまる。しかし、遺物や炭化物が出土せず用途・時期不明の土坑である。

堅堀に設定したトレンチ３の南西側に位置し標高約72mに位置する。青山氏が「二米－三米の道路は曲折四十五米」という道路のおおよそ中間点にあたり、堅堀の最奥部付近と考える。比高約0.7mの段を２つ確認した。　トレンチ４

月見櫓跡の西側に位置する標高76m付近の郭である。青山氏のいう「周囲五十五米の台地」に相当するであろう。この郭に下記に説明するトレンチ5・6・7を設定した。当トレンチは郭の東側に存在する土塁を横断するように設定した。トレンチの中央部で最大幅約2.2m、最大高約0.8mの土塁を確認した。その両側には段をもつ平場が存在する。　トレンチ５

トレンチ５と同じ郭の平坦面を南北方向に幅2.0m、東西方向は幅1.5mの十字状にトレンチを設定した。郭の東側に存在する土塁を横断するよう設定した。この土塁はトレンチ５で確認した土塁の延長である。土塁の東側は平坦であり、溝を確認することができた。土塁とこの平坦面の比高は約1.9mである。土塁の西側には同一方向にのびる幅約3.4mを測る武者走状の平坦面を確認した。土塁との比高は約0.5mである。その西側は一段下がり、標高約75.2mに平場を確認した。南側の山裾部には１条の溝、西端では深さ0.55mのピットを１基検出した。柱痕は明確でない。そのピットと東側の土塁との間に残存高5cmの土塁状遺構が確認できた。地山を削りだして土塁や平坦面を構築しているが、土塁は最上部のみ盛土している様子が窺える。　トレンチ６

トレンチ６で確認した土塁の南端に位置する上部平坦面からトレンチ６の東端で確認した下部平坦面にかけてトレンチを設定した。上部平坦面は標高約77.5mで、地山を削り整　トレンチ７

形した平坦面を確認した。平坦面の東側は約25度の斜面になっており、その麓にも平坦面が存在すると現況から考えられるが、今回は検出できなかった。確認できる比高は約2.3mである。また、ピットを2基を検出したが柱痕は明確でない。

トレンチ8　月見櫓跡といわれるこの郭は、標高約70mに約70㎡の平坦面をもつ。この平坦面の西側にはトレンチ3を設定した竪堀が存在し、南側には斉藤地区の武家屋敷に竪堀が延びる。これらの竪堀によって月見櫓は「独立峰」を構成している。この頂上部の平坦面にT状の試掘坑を設定した。検出面の標高は約69.7mである。その平坦面の南側に土塁を確認できる。連続する土塁の中で少し低く形状が変化する場所に設定した。結果、幅は不明であるが郭の内側に土塁より約3.4m入り込む平坦面を確認した。この形状は、土塁が部分的に流失したのではなく、郭にこのような構造をもっていたことが窺えた。

トレンチ9　月見櫓跡の東側の山際の標約53.5～55.8mにかけて設定した。ここは平成11年度（1999年）に調査された斉藤地区の武家屋敷の背後に位置する。斜面堆積が厚く、地表より最大約3m掘削したところで遺構が確認された。遺構は、土師質皿の破片が多量に出土する土坑を確認した。周囲には上部に平面をもつ石が存在した。

遺　物（表5）

第125次調査で出土した遺物の総数は、255点である。その出土した遺物の内訳は表5に示す。今回の試掘坑場所を地形的観点から山麓に広がる平坦部に設定したトレンチ1・2・9と、それ以外の山部に設定したトレンチ3～8とに大きく分けることができる。前者の試掘面積は27.5㎡で、出土点数は240点であり、1㎡あたりの遺物密度は8.72点である。後者の試掘面積は109.5㎡で、出土点数は15点であり、密度は0.14点となる。山部の出土密度は極端に小さくなる。

試掘の結果から、約430年という歳月によって郭の頂上部は焼土や遺構が流出し、堆積しやすい低部では、約1～2m近い土砂で遺構が埋まっていることが判明した。また、現況下では郭や土塁などは樹木や下草によって、よく分からない箇所も多いが、下草を刈るだけでも遺構の存在位置を確認しやすくなることも明らかとなった。しかし、溝や柱穴など遺構の詳細を判明するには本格的な調査の実施が必要である。（川越光洋）

表5　第125次発掘（試掘）調査出土遺物一覧

トレンチ1	(点)	(%)
越前焼　甕・鉢	2	28.57
土師質　鍋	3	42.85
白磁　杯	1	14.29
染付　皿	1	14.29
合　計	7	

トレンチ3	(点)	(%)
土師質　皿	3	100

トレンチ5	(点)	(%)
土師質　皿	2	100

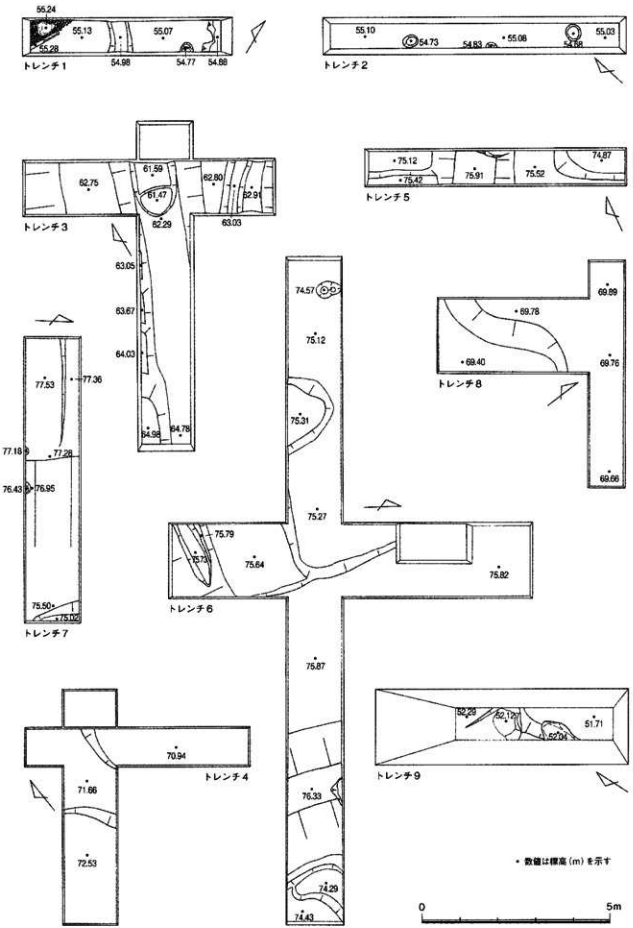
トレンチ2	(点)	(%)
越前焼　甕・壺・鉢	16	50.00
土師質　皿	4	12.50
国産花生	1	3.13
青磁　皿	1	3.13
白磁　皿	5	15.61
染付　皿	1	3.13
青白磁　梅瓶	1	3.13
褐釉　壺	2	6.24
石製品	1	3.13
合　計	32	

トレンチ6	(点)	(%)
越前焼　甕	1	20.00
土師質　皿	2	40.00
灰釉　皿	1	20.00
釘	1	20.00
合　計	5	

トレンチ7	(点)	(%)
土師質　皿	1	100

トレンチ8	(点)	(%)
土師質　皿	7	100

トレンチ9	(点)	(%)
越前焼　甕・壺・鉢	5	2.53
土師質　皿	165	83.33
鉄釉　碗	1	0.51
黄瀬戸　碗	2	1.01
青磁　皿	1	0.51
朝鮮製陶器	1	0.51
金属製品	6	3.02
石製品	6	3.02
炭化材	1	0.51
その他	10	5.05
合　計	198	



第15図　月見櫓地区試掘調査遺構平面図（S=1/100）

4．環境整備（第16～18図、PL.17～18）

環境整備（一般）

昨年度より八地谷川の扇状地である雲正寺地区の整備工事を開始している。雲正寺地区の発掘調査は平成13年度より4年計画で始めたが、平成16年には福井豪雨のため一時中断して被災箇所の復旧を行い、翌平成17年度に調査を完了している。整備地区は4地区に分けられる。それぞれ、平成13年度に第112次調査区、平成14年度に第113次調査区、平成15年度に第114次調査区、平成17年度に第118次調査区を発掘している。このうち、昨年度は第112次調査区及び第113次調査区の計3,500㎡を整備した。今年度は第118次調査区を整備した。

第118次調査区（雲正寺）整備工事

平成17年度に発掘調査をした第118次調査区（雲正寺地係）約4,000㎡について整備工事を実施した。４つの調査区のなかで北西に位置し、北は農道、東は既に整備工事を実施した第113次調査区、南は八地谷川に囲まれ、西は石垣を境にして高台となっている。

発掘調査では、敷地の北部及び南部に掘立柱建物、井戸、道路が検出された。中央部は後世に掘削されており、遺構の残存状況が良好ではなかった。また、西側には石垣と墓跡が確認された。八地谷川沿いに道路が検出されていたが、護岸の整備に関わる箇所のため今回は対象から外した。

調査区は大部分を掘削されており、敷地の正確な規模や用途は不明であったが、個々の建物跡や溝石、階段などはその規模がある程度判明したため復原した。

掘立柱建物　掘立柱建物は規模が判るもので北に２棟、南に１棟検出された。規模は北２棟がそれぞれ３間×５間、２間×２間、南１棟が２間×３間であった。柱位置は堀方のある位置から推定した。柱は150mm角、高さ400mm、十分の一面取を施した栗材を用い、ＡＣＱ加圧注入処理をした。建物内部は砕石基礎の上に自然土舗装で施工し、建物境界には越前瓦（赤色）（120×240×25mm）を用いた。

蔵　蔵は約３m四方の規模をもち、南側に側柱の礎石が検出された。この位置は水勾配をとることによって遺構面が下がったため、盛土に新設の石を設置している。石の隙間には山土を付き固めた。

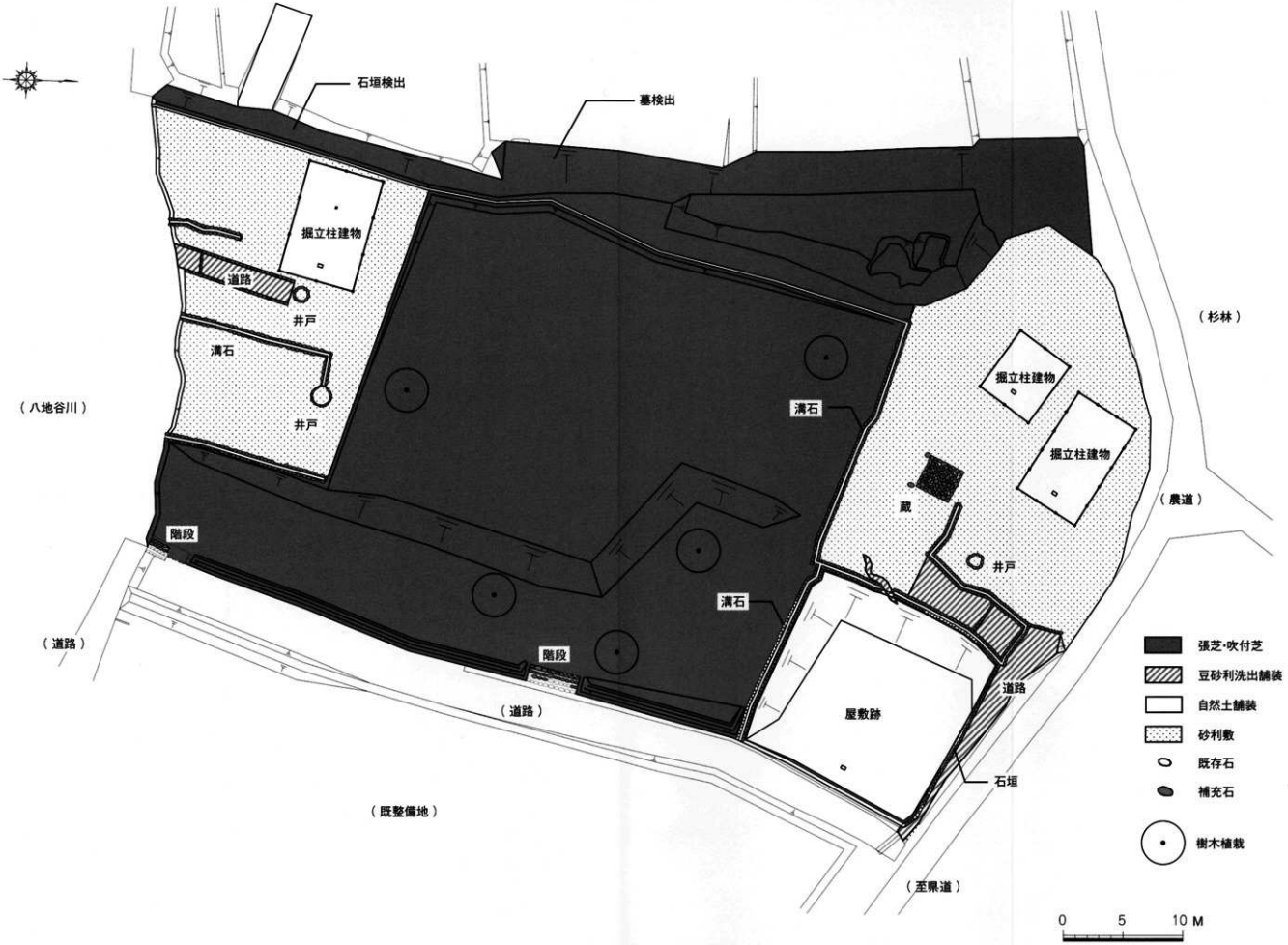
井戸　井戸は深さ約200～500mmを残して埋戻し、内部に砂利を敷いた。蔵と同様、水勾配をとることにより遺構面が下がったため、石を新設した。

道路　道路は豆砂利洗出舗装とした。北東に位置する道路遺構は、最も水が集まりやすいところであり、脇を走る農道との境に割知石を並べ、水量が多いときでも強度を保てるようにした。

階段　階段は石を補充し、踏面は自然土固化舗装で施工した。建物周辺の敷地は防草シートを敷き、その上に砂利を敷いた。

北東隅は北側及び東側に道路と石垣が、南側及び西側に溝石が検出された。これらの道路と溝石による区画は約8m四方で、1つの屋敷跡と推定され、表面を自然土舗装とした。

石垣　石垣は南側に長さ約30mで確認された。調査前から地盤面より浮いた状態で視認でき、はらみが大きく、今回の工事による露出展示は困難であった。そのため、山土で盛土をし



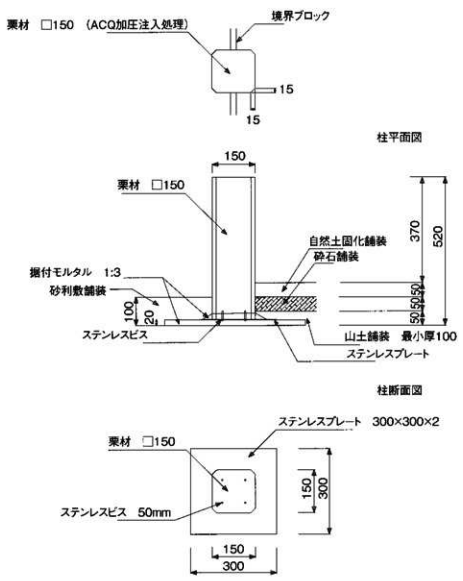
第16図　第118次調査区（霊正寺）整備全体図（1/300）

て石垣を保護し、法面を張芝とした。墓跡は法面保護のために盛土をしたため、遺構表示石を置いてその位置を示した。遺構表示石は、他に掘立柱建物、礎跡、屋敷跡の計6箇所に設置した。表示石は花崗岩を幅350mm×奥行200mm×高さ300mmで加工したものを用い、前面及び側面はこぶ出し仕上げ、上面を本磨きにして文字を陰刻した。 **遺構表示石**

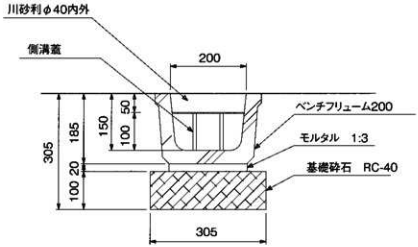
排水は西側の山からの湧水が目立つため、法尻部分にはベンチフリューム（高さ約200mm×内法幅200mm）を設け、山側の脇には砕石及びソダ状暗渠配水管（φ100mm）を設置し、南北に振り分けた。ベンチフリュームの内部は金物で底上げをし、上に玉砂利（径約40mm）を敷いて景観に配慮をした。また、法尻北部に大きな湧水は確認されなかったが、暗渠によって北東の東西道路跡へ連続させた。 **排水**

高木植栽は、ケヤキ1本、イロハモミジ2本、ヤマザクラ2本を植栽した。遺構面を傷つけないよう、盛土をして植えた。芝生は法面を張芝とし、平坦面には吹付け芝とした。 **高木植栽**

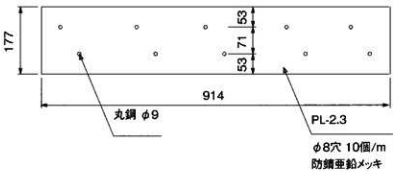
（千木良礼子）



第17図 掘立柱詳細図

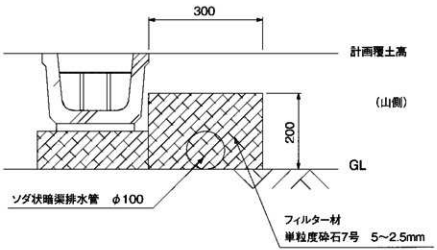


側溝断面図

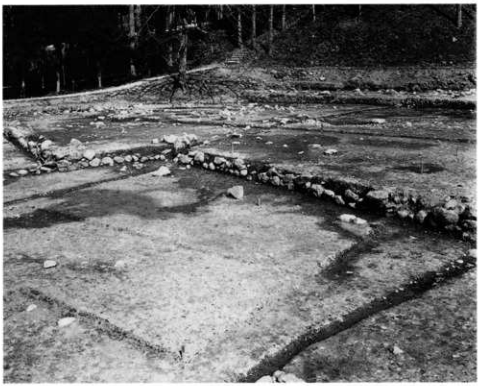


側溝蓋平面図

第18図　ベンチフリューム側溝　S=1/10



第19図　暗渠排水管　S=1/10



SV6123・6124 全景（西より）

SV6120・SD6121 近景（北より）

区画２近景（東より）

SV6145・6140全景（西より）

SS6127 全景（南より）

区画３全景（北より）

SD6142 近景（西より）

区画４全景（南より）

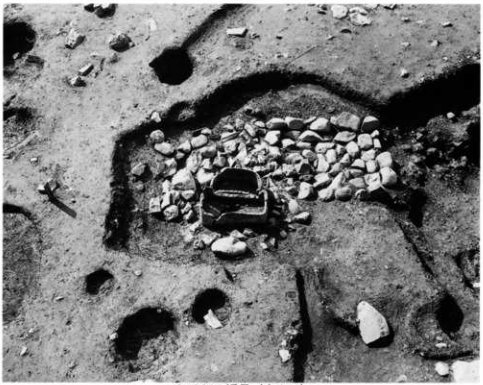
SV6125、SD6126・6165、SS6206 全景（西より）

SB6119、SX6166、SK6162 全景（東より）

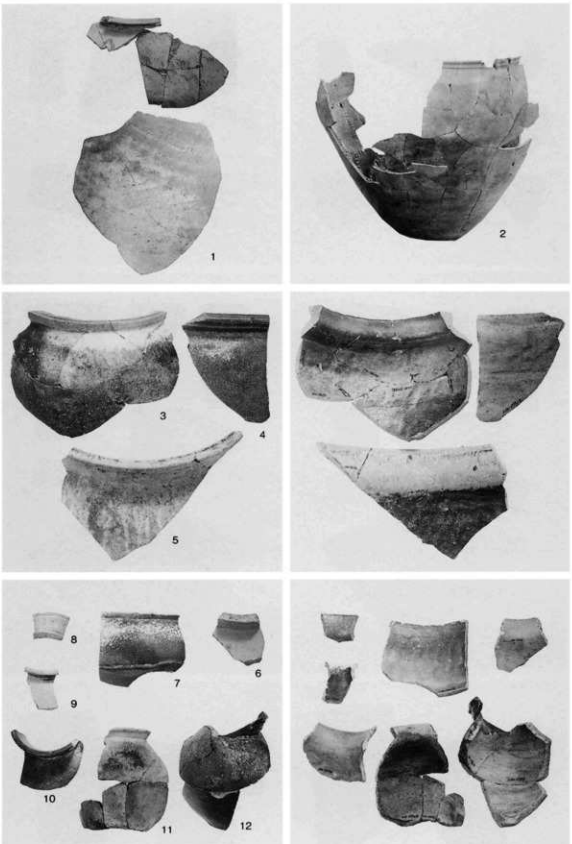
SA6177、SD6178 全景（南より）

SD6174・6183・6186、SZ6184・6185・6187 全景（西より）

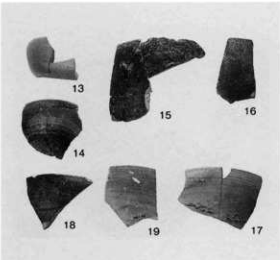
SB6189、SK6190～6199 全景（東より）

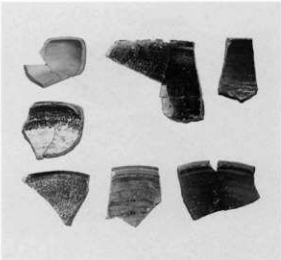


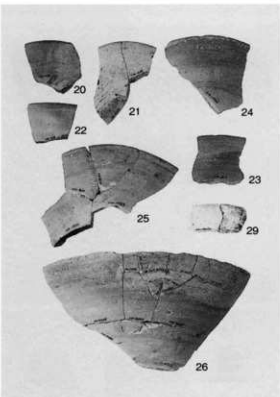
SK6205 近景（東より）

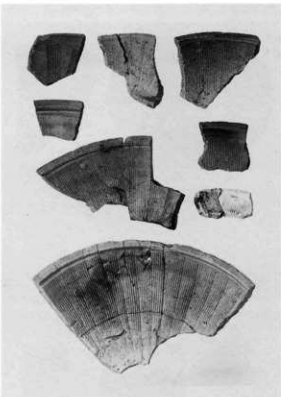


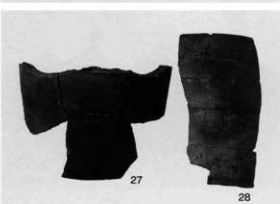
越前焼 甕1～7　壺8～12





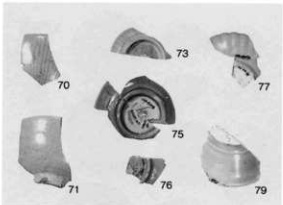


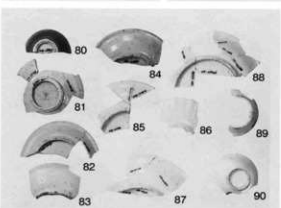


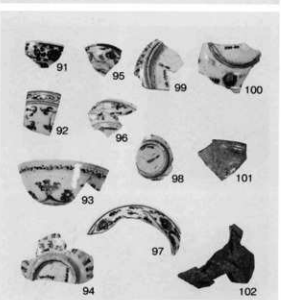


越前焼 鉢13～19　擂鉢20～26　桶27・28　卸皿29

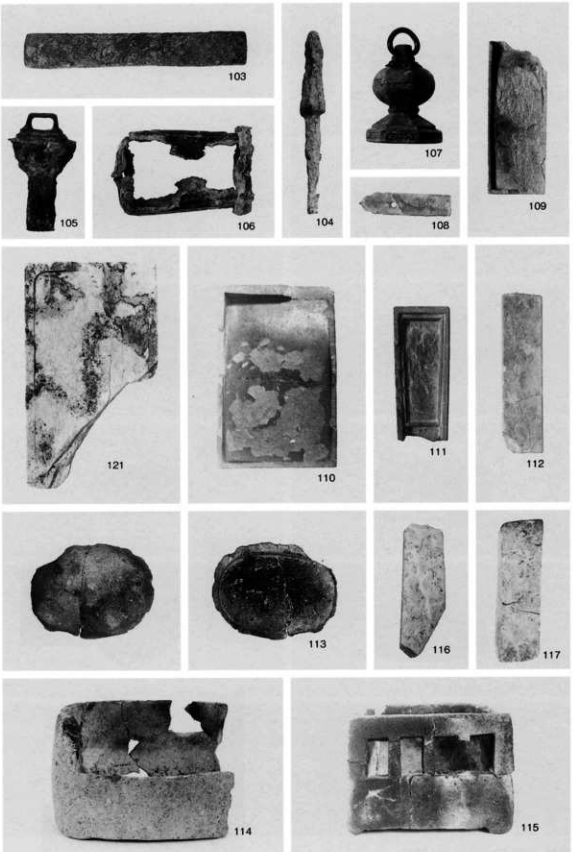
土師質 皿30～44　**鉄釉** 碗45～47　皿48～51　水滴52　壺53～55　瓶56～58　桶59・60
灰釉 皿61～65　壺66　**信楽焼** 桶68　**国産** 掛花生69







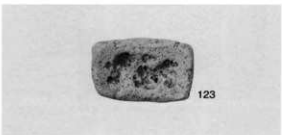
青磁 碗70・71　皿72～78　瓶79　**白磁** 皿80～88　坏89・90　**染付** 碗91～94　皿95～100
朝鮮半島製品 碗101　瓶102



金属製品 小柄103　鉄鏃104　足金物105　兜金106　分銅107　飾金具108
石製品 硯109・110・121　用途不明製品111・112　バンドコ113～115　砥石116・117

122

128


123

129

124

130

125

131

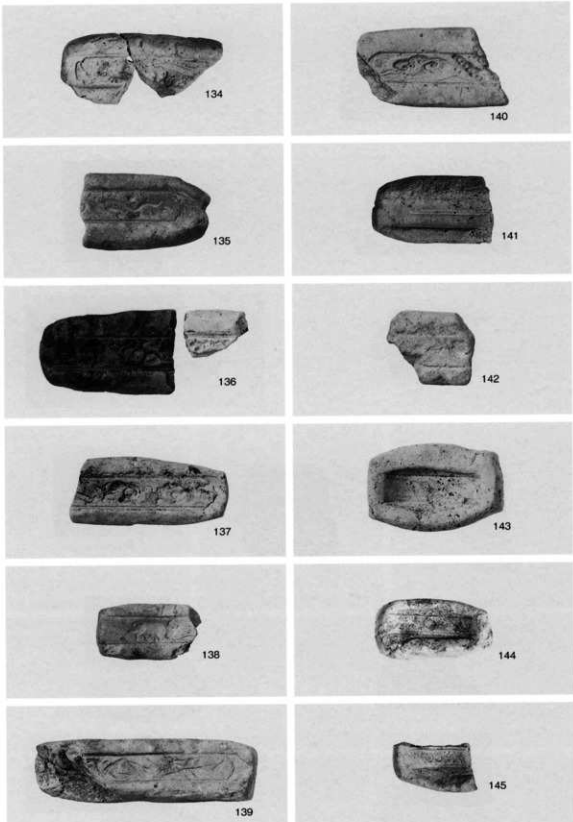
126

132

127

133

鋳型 目貫122～132　笄133



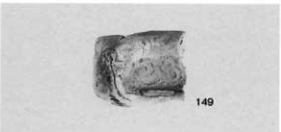
鋳型 笄134～142　緑金物143～145

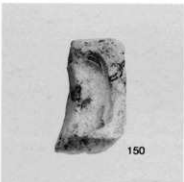
146

147

148

151・152


149


150

153

155

154

156

157

158

鋳型 緑金物146　兜金147・148　栗形149　緑頭150　鍔151～153　不明154～158

トレンチ１（北から）

トレンチ３（南から）

トレンチ6（東南から）

トレンチ8（西から）

北側整備地（西から）

北側整備地（東から）

南側整備地（西から）

掘立柱建物と井戸

報告書抄録

ふりがな	とくべつしせきいちじょうだにあさくらしいせき
書名	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡38
副書名	平成19年度発掘調査・環境整備事業概報
シリーズ番	38
編集者名	水村伸行
編集機関	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
所在地	〒910-2152　福井県福井市安波賀町4－10　TEL.0776-41-2301
発行年月日	平成20年3月30日

調査地区	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
第124次調査	福井市城戸ノ内町字米津	18210	史－31	35° 59′ 39″	136° 17′ 48″	070401 ～ 080331	2,500㎡	環境整備に伴う事前調査
第125次調査	福井市城戸ノ内町字八地谷・雲正寺・斉藤	18210	史－31	35° 59′ 53″	136° 00′ 28″	081001 ～ 081220	500㎡	試掘調査

調査地区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
第124次調査	屋敷	室町・戦国時代（15・16世紀）	屋敷７区画、道路３石敷建物１、礎石建物５	越前焼、土師質土器、瀬戸・美濃焼、中国製陶磁器（白磁、青磁、染付）、朝鮮製陶磁器、石製品、金属製品、鋳型	刀装具関係金属製品工房跡を確認した。
第125次調査	櫓跡	室町・戦国時代（15・16世紀）	土塁、整堀、掘立柱、建物	越前焼、美濃焼、中国製陶磁器（白磁、青磁、染付）	櫓の残存状況が確認された。

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡38

平成19年度発掘調査・環境整備事業概報

発行年月日　平成20年3月31日

編集・発行　福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館©

印　　刷　河和田屋印刷株式会社